

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

三つ目の任務としての看護教育：  
学長を終えるにあたって：退任の辞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 喜多, 悦子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/230">https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/230</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 退任の辞

### 三つ目の任務としての看護教育 学長を終えるにあたって

喜多悦子

30 数年前、アメリカ NIH/NIEHS（国立衛生研究所/国立環境衛生科学研究所）での 2 年近い研究員生活後、出発した羽田とは異なる成田空港に機が近づくにつれて、やっと帰り着くべき地が見えた、とホッとしました。小児科/臨床検査学の実践と研究、教育、そして国際保健に続く三つ目の任務であった日本赤十字九州国際看護大学での 8 年の学長職を含む 12 年の看護教育への関与の終わりを目前に、同様の感慨を覚えます。

新設日本赤十字九州国際看護大学で「国際」を教える機会を得て着任した宗像の地は、生まれ育った宝塚の農村地域と似た懐かしく心和む美しい自然に恵まれた地でした。開設時、既に、4 年制看護大学は 100 を数えていましたが、「国際」を標榜するユニークな大学で、どのような役割を果たすのか、何が出来るのか、看護教育という未知の分野に恐る恐る足を踏み入れた日々を懐かしく思い出します。開学直後、初代学長から、大学の「国際化」計画を提案するよう指示を受けたのは、まだ、大学そのものがフル稼働できていない時期、予算も人材もない不慣れの中でした。

それまで関与させて頂いてきた国際協力機構（JICA）や大学の母体日本赤十字社のご協力、ご指導、そして研究費をあてに案を作成し、5 年後、8 年後、10 年後の数字入り目標、今様には、本学国際化マニフェストを提出し、開学年の 7 月 11 日に国際をテーマにしたシンポジウムを開催しました。5 年後に学生の X%、教職員の Y% が国際経験を持つ、10 年後には卒業生の Z 人が外国で活動または経験している、教員は・・・といった数値目標の多くは、その後、学長を拝命し陣頭指揮する立場になったこともあって相当まっとうできました。

改めて、本学の発展に尽力された教職員、学生と卒業生さらに本学をご支援下さった内外関係者各位に感謝申し上げます。

本学就任時、私の大きな危惧は学生との疎通性でした。

医科大学で小児科や検査医学に従事した間、教育診療を通じ学生諸氏と密な交流がありましたが、その後の 20 年以上の国際保健専従時代のカウンターパートは、内外の行政や管理層か途上国の実務家、学生交流はきわめてわずかでした。UNICEF、WHO 勤務で経験した紛争地でも大学生交流は皆無にちかく、日本人学生との交流も限定的でした。高齢者に近い年齢の私が、急に 2 世代もかけ離れた若者と交流できるのか？心細い気持ちで最初の入学式に臨みました。しかし、案ずるより産むがやすし・・・という言葉を実感したのは間もなくです。

学生も1学年だけ、教員数も限られていた初期の日々、大学は途上国の速成教育施設のようなピカピカだが落ち着かない雰囲気でもありました。が、その中で110名余の一期生と両手で数えられるに近い教員は、ともに到達すべき目標に対し、ある種の連帯意識があったような気がします。実際、看護教育に不馴れな私を叱咤激励してくれたのは、看護系教員だけでなく、孫の世代の学生諸氏だったことを、今、感謝をこめて告白します。

看護の深淵さとある種の未知への誘惑、不謹慎な表現ですが、蠱惑的なワナにはまった後、学長の重責を担い、一転、その科学性判断性の解明と格闘し、瞬く間に8年が過ぎました。

大学運営とは、正解のない難問群に果てしなく挑戦し続ける仕事であり、越えても越えてもより険しい高峰が続く登山であり、その意味では、私は頂上を極めることはあり得ません。かつて貧困国の辺境で経験し、紛争地の破壊された診療所で実感したのですが、必要でbestと思う案を創出できても、実践できるかどうかは周囲の状況と持てる資源人材次第です。悪戦苦闘してきたと申すより、力が足りなかった、とお詫びしたい気持ちでいることも事実です。

苦難苦痛の一方、学生諸氏の成長、発展を実感することは何物にも代え難い喜びでした。特に自主研修として2004年3月に訪問したベトナム以降、ミャンマー、フィリピン、ラオス/タイ、インドネシア、インド、カンボジア、そして開学十周年記念のロンドンとジュネーブ、さらに2011年の東北被災地、2012年のブータンと続いている海外研修は、半世紀近い年齢を超えて、同じ釜の飯を頂く仲間意識を醸し出したことは私の宝物となっています。

さて、看護分野の教育は長らく実践的でもありましたが、医学のみならず福祉、介護を含む人々のwell-beingを取り巻く学問は人類未踏の高齢社会の出現とともに、激しく変遷しつつあります。それは、幸か不幸か、わが国が世界で初めて経験する事態でもあります。今必要なこと、求められていることは科学的論理的普遍性をもった看護学の教育と、実践におけるイノベーションでしょう。看護を必要としているのは、医療施設の中だけではありません。紛争や災害の地だけではなく、病人やけが人だけではなく、人口の半分以上が高齢化する地域、社会の中のすべての人々が看護を必要としています。類稀な人道的分野である看護が広範に活用されるためには、看護は狭い専門分野から飛び出し、その社会化を進めるべきです。看護教育の場の学際的イノベーションが必要です。

開設12年を経た日本赤十字九州国際看護大学には、その萌芽があり、既に千名を越えた卒業生の中から、それを実践する人々が輩出する日が近いことを信じて任務を終えられることを感謝と喜びを持って報告申し上げ、擱筆します。  
ありがとうございました。